

令和6年度こども家庭科学研究費補助金
(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業)
分担研究報告書

全国調査の実施

研究協力者：寺島 智美（国立成育医療研究センター社会医学研究部）
研究協力者：オーレリー ピバーシェ（国立成育医療研究センター社会医学研究部）
研究協力者：須山 聡（北海道大学 児童思春期精神医学研究部門）
研究協力者：福屋 吉史（東邦大学 精神神経医学講座）
研究協力者：山脇 かおり（国立障害者リハビリテーションセンター発達障害情報・支援センター）
研究分担者：森崎 菜穂（国立成育医療研究センター社会医学研究部）
研究代表者：石塚 一枝（国立成育医療研究センター社会医学研究部）

研究要旨

目的：新型コロナウイルス感染症の流行及び感染症対策は、休校、学級閉鎖、行動制限など、子どもを取り巻く環境にさまざまな変化をもたらした。本研究では、新型コロナウイルス感染症の流行および感染症対策後の子どもの生活や環境の変化、およびそれによる子どもの心身の健康・成長発達への影響について検討する。

方法：R5年（2023年）度に、乳幼児調査、学童期調査の2つの調査を実施し、本年度に追加の調査や調査結果の分析を行った。乳幼児調査では、新型コロナウイルス流行中の2021年に出産・育児をしていた女性の縦断インターネット調査 The Japan COVID-19 and Society Internet Survey (JACSIS)において2023年に追跡調査を実施した。学童期調査では、R2年（2020年）より開始している全国無作為抽出された全国の小中高生について、コロナ下における生活等に係る調査の追加調査を実施した。

結果：乳幼児調査、学童期調査を実施し、2～4歳の乳幼児（母親回答）2397人、小5から中3の学童期（本人及び保護者回答）1995人から回答を得られた。学童期調査では、制限が緩和された後も子どもたちの孤独感は改善していないことが示唆された。

結論：新型コロナウイルス感染症パンデミックによる環境の変化による心身への影響は、行動制限の緩和後もすぐには回復せず、抑うつ傾向は依然として悪化が続いていることが示唆された。

A. 研究目的

本研究では、新型コロナウイルス感染症流行下等の社会的な環境において、子どもの心身の発達や健康に及ぼす影響を把握する。

B. 方法

本研究は、【調査1】乳幼児期にかかわる調査と、【調査2】学童期にかかわる調査の2つの調査から構成される。

B-1: 【調査1】乳幼児期に関わる調査方法

コロナ下で出産した女性の縦断インターネット調査 The Japan COVID-19 and Society Internet Survey (JACSIS)のうち、2022年2月の追跡調査に参加している研究参加者（乳幼児がいる子どもの母親）に対して2023年8～10月に追跡調査を実施した。JACSISでは、父母の心身の健康・経済状況、養育、愛着、発達（自閉傾向）に関する情報を収集しているが、本研究はその後のフォローアップとして、子どもの発達、情緒・行動および予防接種状況など子どもの心身の健康に関する情報を追加し、コロナ下での子どもの心身の健康への影響を検討した。

子どもの心身の健康状態は、子どもの情緒・行動を評価する心理尺度である子どもの強さと困難さアンケート（Strengths and Difficulties Questionnaire; SDQ）を実施した。SDQは強みに関する下位尺度1つ（向社会的行動）と困難さに関する下位尺度4つ（情緒不安定、問題行動、多動・不注意、友

人関係の問題）によって、子どもの適応と精神的健康の状態を包括的に把握するための質問紙である¹⁾。東京都医師会「5歳児健診マニュアル」を参考に、下位尺度別、および総合スコアについて、支援の必要性を「Low Need(ほとんどない)」「Some Need(ややある)」「High Need(おおいにある)」の3段階で評価した。

B-2: 【調査2】学童期に関わる調査方法

全国無作為抽出された小中学生を対象に、コロナ下での子どもの精神的不調（うつ等）とその要因である家庭の環境（経済状況、養育等）、孤立、レジリエンス、休校等について、質問票の郵送による縦断調査研究を2020年より、毎年実施している²⁾。行動自粛など新型コロナウイルスパンデミックにおける感染対策が緩和した後の心身への健康状態を把握するため、2023年と2024年に調査を実施した。

1. 子どもの心理社会的状況

1) 抑うつ・孤独感

新型コロナウイルス流行中に思春期年齢で増加が懸念された抑うつについて、評価した。抑うつの評価には、Patient Health Questionnaire for Adolescents (PHQ-A) 日本語版を用いた^{3,4)}。これは思春期の子どもを対象とした抑うつの重症度尺度である。過去7日間について、9項目の質問に対して4段階（全くない:0点、数日:1点、半分以上:2点、ほとんど毎日:3点）で尋ね、点数化する。総合点は0から27点で、点数

が高いほどより重度のうつ症状が示唆される。

また、孤独感については、日本語版 UCLA 孤独感尺度第3版の短縮版を用いた。これは孤独という主観的な感情を数値的に測定するための UCLA 孤独感尺度を、子どもから高齢者まで使いやすく3つの質問に簡潔にしたもので、人との付き合い、取り残されていると感じるか、孤立について、4段階（決してない：1点、ほとんどない：2点、時々ある：3点、常にある：4点）で尋ね点数化し、総合点は各項目の平均点で示している。点数が高いほど孤独感が高いことが示唆される。

2) 問題のあるインターネット使用

新型コロナウイルスパンデミック中に利用が加速したインターネット使用に伴い、問題のあるインターネットの使用（社会生活の広範囲に悪影響を及ぼす、認知および行動の症状からなる多次元的な症状、Problematic internet use）を把握するため、インターネット依存スクリーニングテスト診断質問票（Diagnostic Questionnaire; DQ）を用いた。DQは、8つの質問に対して「はい」（1点）、「いいえ」（0点）で尋ね、合計点を算出する。8項目のうち、5項目以上が該当する場合、問題のあるインターネット使用のリスクがあると評価されている（カットオフ5点）5）。

C. 結果

C-1：【結果1】乳幼児期に関わる調査結果

2～4歳の乳幼児の母親 2397 人から回答を得た。SDQ でみた子どもの総合的困難さは、支援ニーズが「大いにある」「ややある」を合わせて 30%であった。

（図1）今回調査における「総合的困難さ」および、下位サブスケールの「行為の問題」「多動・不注意」「仲間関係の問題」の値は、新型コロナウイルス流行前の日本の平均的な SDQ 値よりも高く、支援の必要性が増していることが示唆された。また、下位指標のうち、強みを示す「向社会的な行動」においては、日本の平均値を下回っていた。（図2）

また、マスク着用と SDQ との関連性がみられた。さらに詳細な分析を行い学術雑誌に投稿予定である。

C-2：【結果2】学童調査結果

小学5年生～高校2年生の子ども 3367 名およびその保護者に質問票による郵送調査を実施した。その結果、2023 年調査では、子ども 1928 名、保護者 1991 名から回答が得られた。2024 年のフォローアップ調査では、2606 名に配布し、保護者 1551 人、本人 1551 人から回答が得られた。

子どものうつ傾向を測る PHQ-A 中等度以上（10 点以上）は、全学年でみると、2021 年は 11.4%、2022 年は 13.3%、2023 年は 13.3%、2024 年は 14.6%に増加した。（図3）小6と中2で「中等度」の割合が増加したことが要因と考えられ、その他の学年では中等度以上の割合は、概ね横ばいであった。その他、中2と高1では、予備軍とも捉えられる「軽度」の割合が 26%（中2で前年比+9 ポイント、高1で+8 ポイント）へと増加し

ている。新型コロナウイルス感染症収束後も、抑うつ傾向については悪化傾向が続いている。

UCLA 孤独感尺度は、2022 年の 1.68 から 2023 に 1.76 へと悪化していたが、2024 年は 1.73 へ若干の改善がみられた。学年別では、小 5 から中 1 までは 1.5~1.65 だが、中 2 以上になると、1.72~1.88 に高まっていた。（図 4）

インターネット依存スクリーニングテストによる「病的使用者」と「不適応使用者」となった子どもの割合は、2024 年には、50.6%となり、学年でみると、中 1 以上の全ての学年で 50%以上であった。全体では、2023 年の 51.3%から 0.7 ポイント改善したものの、小 6 から中 2 にかけては悪化した。（図 5）

D. 考察

新型コロナウイルスパンデミックの行動制限下で、人々は厳しい行動制限を受け、社会との交流が限定されていた。しかし、パンデミックが沈静化して行動制限が緩和されたにも関わらず、抑うつ傾向は 2024 年においても悪化傾向が続いている。行動制限中に縮小した社会関係や職場・学校での人間関係は、解除後に直ちに元の状態に戻るわけではない。社会的交流の再構築には時間を要し、一部の人々にとっては再び対人関係に適応することが新たなストレスとなっている可能性がある。また、思春期は、友人関係の構築や自己同一性の確立など、心理社会的発達において重要な時期である。パンデミックによる行動制限は、学校生活や部活動、同世代との交流機会が制限され、こうした心理社会的発達課

題の達成を妨げられた可能性が考えられる。抑うつと関連する孤独感は一度悪化すると短期間で回復しにくい。

一方、子どもたちの問題のあるインターネット使用や UCLA 孤独感尺度の結果は、2023 年まで悪化傾向が続いた。しかし、2024 年になって、行動制限解除による生活習慣に変化が見られ始めると、ようやく若干の改善がみられた。また、孤独感については、人々と対面で会う機会など、社会的環境変化がより直接的に影響する部分もあり、抑うつ傾向より早期に改善傾向が見られたものと考えられる。

E. 結論

本研究では、新型コロナウイルスパンデミックで変化した行動制限が緩和された後も、子どもへの発達や心身の健康の影響が続くことが示唆された。問題のあるインターネット使用や孤独感など、行動制限に直接的に影響を受けやすいと考えられる項目は 2023 年まで悪化を続けて 2024 年に回復傾向となったが、抑うつ傾向については、2024 年においても悪化傾向が続いている。

参考文献

- 1) Goodman, R., Meltzer, H., & Bailey, V. (2003). The Strengths and Difficulties Questionnaire: A pilot study on the validity of the self-report version. *International Review of Psychiatry*, 15(1-2), 173-177.
- 2) Shinno K, Ishitsuka K, Piedvache A, Morisaki N. Frequency and number of somatic symptoms in association with

- depressive symptoms in Japanese children aged 10-15: a population-based study. *Eur J Pediatr*. 2025;184(9):564. Published 2025 Aug 20. doi:10.1007/s00431-025-06399-9
- 3) Johnson JG, Harris ES, Spitzer RL, Williams JB. The patient health questionnaire for adolescents: validation of an instrument for the assessment of mental disorders among adolescent primary care patients. *J Adolesc Health*. 2002;30(3):196-204. doi:10.1016/s1054-139x(01)00333-0
- 4) Adachi M, Takahashi M, Hirota T, et al. Distributional patterns of item responses and total scores of the Patient Health Questionnaire for Adolescents in a general population sample of adolescents in Japan. *Psychiatry Clin Neurosci*. 2020;74(11):628-629. doi:10.1111/pcn.13148
- 5) Kaneita Y, Kanda H, Ohida T, Higuchi S. Internet use and problematic Internet use among adolescents in Japan: A nationwide representative survey. Mihara S, Osaki Y, Nakayama H, Sakuma H, Ikeda M, Itani O, *Addict Behav Rep*. 2016 Oct 15;4:58-64. doi: 10.1016/j.abrep.2016.10.001. eCollection 2016 Dec.
- F. 健康危険情報
該当なし
- G. 研究発表
該当なし
- H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）
該当なし

乳幼児調査

1. SDQ (Strength and Difficulties Questionnaire : 子どもの強さと困難さアンケート)

2歳以上5歳未満の子どもを持つ人が対象です。該当するお子さんが複数いる場合は、一番年齢が低いお子さんについてお答えください。お子さまのここ半年くらいの行動についてお答えください。以下のそれぞれの質問項目について、あてはまらない、まああてはまる、あてはまる、のいずれかを選んでください。答えに自信がなくても、あるいは、その質問がばからしいと思えたとしても、全部の質問に答えてください。

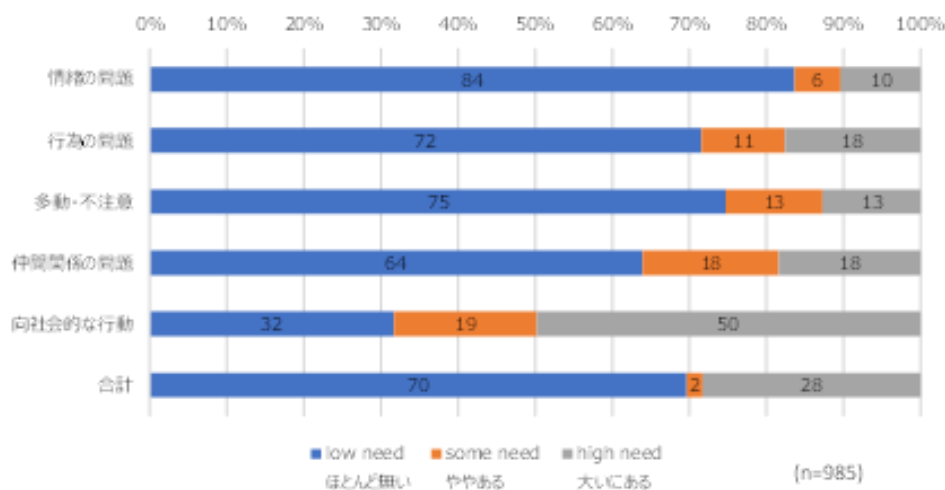


図1 子どもの情緒・行動(SDQ スコア)



図2 SDQ スコアの日本平均 SDQ¹との比較

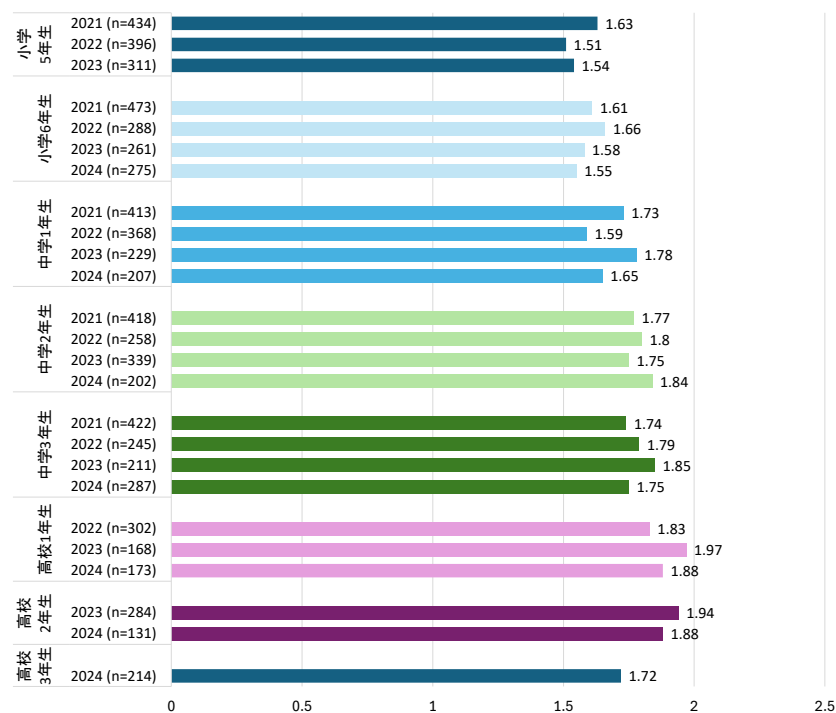


図4 孤独感（総合点）

3. 問題のあるインターネット使用（2022-2024）

Young Diagnostic Questionnaire for Internet Addiction (YDQ)*を用いて、子どもの問題のあるインターネット使用について尋ねた。

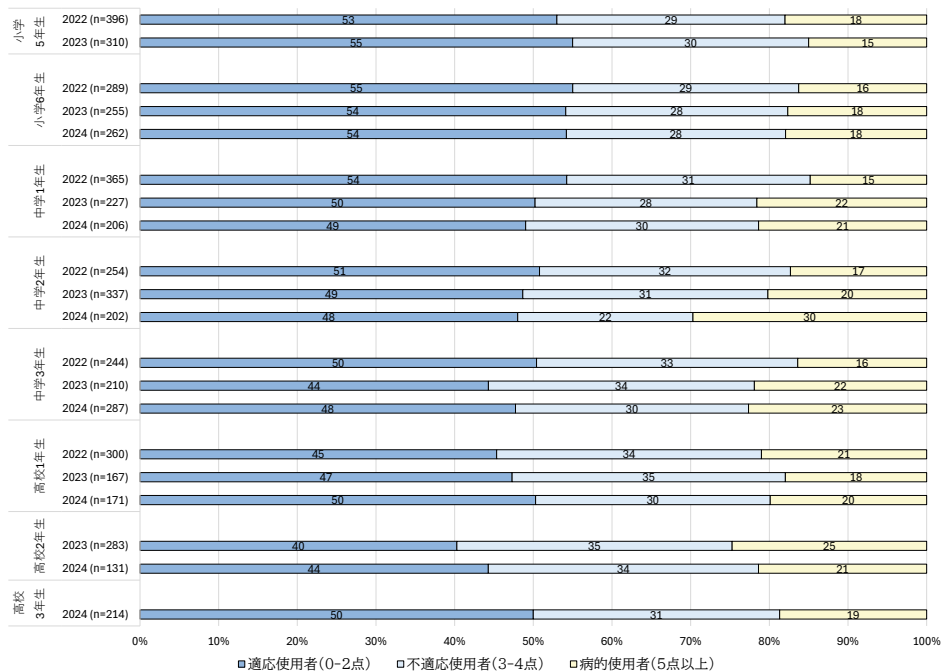


図1 問題のあるインターネット使用の状況